まえがき……1

第一章　これまでのいろは歌　―空海説の変遷―

第一節　いろは歌とは何か……9
第二節　平安時代から中世にかけてのいろは歌……12
第三節　近世のいろは歌……17
第四節　明治以降のいろは歌……24

第二章　知られざる暗号　―物部良名の小宇宙―

第一節　暗号解読の発端……35
第二節　解読された暗号……41
第三節　「む」と「ん」の区別の存在……51
第四節　ア行の「え」とヤ行の「え」の区別の存在……55
第五節　暗号語彙のアクセントの年代観……62

第三章　新しい年代観　―菅原道真の影―

第一節　「代悲白頭翁」の影響……71
第二節　『新撰万葉集』の影響……76
第三節　『古今和歌集』への採録……81
第四節　『古今和歌集』以降『金光明最勝王経音義』以前の痕跡……90
第五節　再び、いろは歌とは何か……104

注……113
付録……123
付記……127
索引……128

新装版によせて……136
新装版への覚書……138
著者経歴……140

第一章　これまでのいろは歌

―空海説の変遷―

第二節　平安時代から中世にかけてのいろは歌

現存最古のいろは歌は、平安時代後期の承暦三年（一〇七九）に書かれた仏教書『金光明最勝王経音義』の冒頭に置かれているものである。この本のいろは歌は、万葉がなで次のように書かれている[2]。

以伊　呂路　波八　耳尓　本保　へ反　止都

千知　利理　奴沼　流留　乎遠　和王　加可

餘与　多太　連礼　曽祖　津ッ　祢年　那奈

良羅　牟无　有宇　為謂　能乃　於　久九

耶也　万末麻　計介気　不布符　己古　衣延　天弖

阿安　佐作　伎幾　喩由　女馬面　美弥　之志士

恵會廻　比皮非　毛文裳　勢世　須寸

日本最古のいろは歌が何ゆえ仏教書などに出ているのか、その疑問は第三章において解き明かすことにして話を前に進める。この万葉がなのいろは歌を通常のひらがなに置きかえてみる。

いろはにほへと

ちりぬるをわか

よたれそつねな